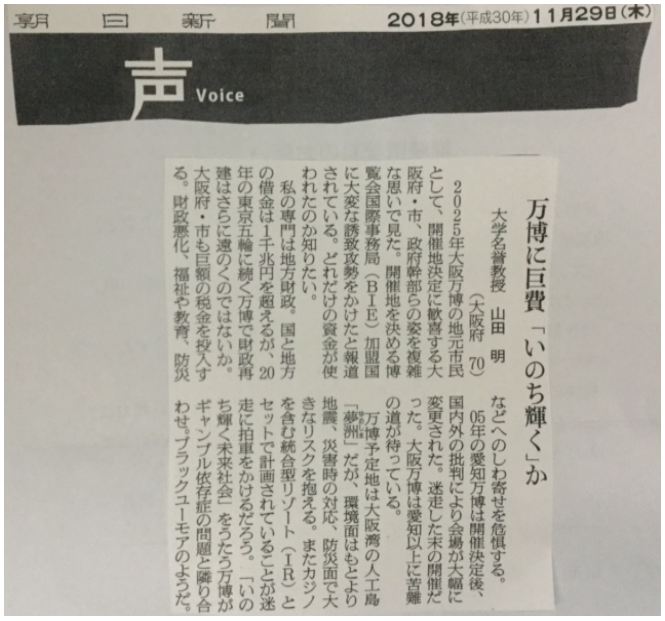
「声」が届く

大阪万博についての私の「声」が、多くの人に届いたようだ。

私が「声」に投稿してから、かなりの年月が経つ。水田洋先生の投稿を読んで、刺激を受けた。先生にも触発され、名古屋五輪誘致に関連して投稿を始めた。



朝日新聞　2018年(平成30年)11月29日(木)

声 Voice

万博に巨費「いのち輝く」か

大学名誉教授　山田　明（大阪府　70）

2025年大阪万博の地元市民として、開催地決定に歓喜する大阪府・市、政府幹部らの姿を複雑な思いで見た。開催地を決める博覧会国際事務局（BIE）加盟国に大変な誘致攻勢をかけたと報道されている。どれだけの資金が使われたのか知りたい。

私の専門は地方財政。国と地方の借金は1千兆円を超えるが、20年の東京五輪に続く万博で財政再建はさらに遠のくのではないか。大阪府・市も巨額の税金を投入する。財政悪化、福祉や教育、防災などへのしわ寄せを危惧する。

05年の愛知万博は開催決定後、国内外の批判により会場が大幅に変更された。迷走した末の開催だった。大阪万博は愛知以上に苦難の道が待っている。

万博予定地は大阪湾の人工島「夢洲」だが、環境面はもとより地震、災害時の対応、防災面で大きなリスクを抱える。またカジノを含む統合型リゾート（IR）とセットで計画されていることが迷走に拍車をかけるだろう。「いのち輝く未来社会」をうたう万博がギャンブル依存症の問題と隣り合わせ。ブラックユーモアのようだ。

多様な意見が、どのように掲載されるか関心がある。

自然科学者の西条八束先生が、私の空港問題の投稿を読み、翌日に手紙を送ってくださった。西条先生も、「声」などによく投稿されていた。

名古屋から大阪に転居して、投稿を控えていたが（今年初めに投稿したが採用されなかった）、今回3年ぶりに掲載された。新聞を開くと、必ず「声」をチェックする。どんな投稿が掲載されているかを確認するためだ。読者の

最近の「声」で心に響いたものがある。11月27日に掲載された、千葉県の11歳の小学生による「困難に向き合い言葉発したい」だ。どもりに困っているが、「私はこれからも、どもることと向き合って上手に生きていきます」と。

じつは私も高校生の頃まで、どもり（吃音）に悩まされてきた。この小学生と同じように、最初の言葉が出せないのである。国語の時間に、教科書を読む順番が近くなると、早く終了のチャイムが鳴ることを願っていた。どもりで、いじめられたことも。

この小学生は「最近、言葉には同じ意味でも違う言い方があることに気づいたのです」と書いているが、まったく同じことを考えた記憶がある。すこし「調子」をつけて話しだすと、喋れるようになっていった。クラスで落語めいたことも。

こんな私が大学時代には、デモの先頭に立ち、シュピレヒコールの音頭をとった。1968年のことで、半世紀の月日が流れた。そして、大学の教壇に立つことに。人生というものは、不思議なものだ。

この小学生もきっと人前で堂々と話せるようになるだろう。いや、どもりなんか気にしないで、生きていくであろう。こんな「声」を届けたいものだ。

（2018年12月1日）